

生徒会騒乱編 下巻



あんさんぶるガールズ!

原作・イラスト

Happy Elements 株式会社

Presented by Akira

日 日 日

OVERLAP

OVERLAP

あんさんぶるガールズ!

生徒会騒乱編 下巻

日 日 日

君咲学院へようこそ!

^{めいび}
風光明媚な自然に包まれた、私立君咲学院。

去年までは伝統ある女子校だったが、
時代の流れから男女共学校になろうとしている。

あなたは、そんな君咲学院に転校してきた、唯一の男子だ。

のほほんとした校風の君咲学院に、
あなたはおおきな波乱を巻き起こしていく。

あなたが巡りあう運命は、奇想天外で、明るく楽しい
充実した学園生活。たくさんの少女たちと絆を紡ぎながら、
あなたは青春を^{おうか}謳歌していく。

君咲学院で巻き起こる^{はらん}波瀾万丈な日常を、
どうか心ゆくまでお楽しみあれ。

{ CONTENTS }

第五部 騷乱 ————— 006

第六部 裏表 ————— 064

第七部 祝祭 ————— 138

第八部 決戦 ————— 235

Ensemble ————— 301

第五部 騒乱

「それでは、定例の『運動部部長会議』を始める！」

生徒会長——鶴海ひまりは胸を張って宣言する。

可愛らしく子供っぽいその声が、君咲学院のすべてに滲透し響き渡る。

「今期予算の決議を中心に、運動系の部活動についての議題ならば何でも結構——この機会に、意見があればどしどし言ってくれればいいのだあ！」

生徒会長はひよっとすると小学生にも見られそうな小柄な女の子だ。けれど身にまとう制服は三年生のそれであり、腕には輝かしい生徒会長の腕章が巻かれている。艶やかな黒髪は長く、前がよく見えるようにおおざっぱに整えられている。

やや尊大に胸を張りながら、生徒会長は青春の充実感に打ち震えていた。

（くうっ、久しぶりだなあこういう生徒会長っぽい仕事は！）

そして目の前の光景を、眺める。

こういった部活動や委員会の合同会議など、たくさん的人数が集まる際に利用されるL1教室である。放課後で、窓の外では陸上部の面々がランニングをしていたりハードルを並べていたり、下校途中の生徒が他愛ないお喋りをしていたりする。

そちらを眺めて、生徒会長は「うん、うん」と満足げに頷いた。

（ああ、よかった——『秘密の勉強会』のおかげで何とか赤点を免れ、せえとかいちよおとしての仕事をまうことができることになった！『魔王』久坂あやめには感謝せねばな！）

現在、生徒会長はある苦難に直面している。

——ゴシップ好きの新聞部が『生徒会長再任選挙』などと名づけて煽りたてているそれはもともと優れた生徒会長を選び直そう、という運動である。

先代の生徒会長、円城寺れいかから後任に指名されたひまりだが、いまだ未熟なうえ情熱が空回りして失敗を繰り返していた。その情けない姿に生徒たちは不安を抱き、『生徒会長再任選挙』を開催してより相応しいものにその地位を与えようとしている。

だが、それを黙って看過できないのが現職の生徒会長である。

先代から地位を譲られ、せいっぱいに生徒会長の職務を果たそうとしている彼女——鶴海ひまりは、生徒たちから信頼される立派な仕事ぶりを見せつけたり、また人助けなどをして好感度を高めたりと、東奔西走していた。

その甲斐もあってか、新聞部の校内新聞などにより信用と人気が地に落ちていた生徒会長もじよじよに持ち直して——こうして、いまだに『生徒会長再任選挙』が開催されることなく職務を全うできている。

だが、懸念は消えたわけではない。

これまた新聞部が開催した人気投票——『生徒会長に相応しいものは誰だ?』という校内アンケートの結果、現職の生徒会長である鶴海ひまりよりも上位に位置していた五人の生徒がいる。

それら五人は実際に『生徒会長再任選挙』が開催されたら間違ひなく鶴海ひまりの強力なライバルになるであろうと予想され、そのまんま『対立候補』と呼ばれている。

『対立候補』は、より上位の人気者から順番に——。

第一位、『女王陛下』 円城寺れいか

第二位、『生き神』 神樹はじめ

第三位、『魔王』 久坂あやめ

第四位、『王子様』 四方みつる

第五位、『墮天使』 黒森すず

となっている。

このうち『生き神』『魔王』とは和解が成立し、事態の発端である新聞部も近ごろはなりを潜めているので——それなりに平穩に、生徒会長はその職務を全うできていた。

まだ油断はできないが、快調である。

(運動部のもは私と同様に勉強が苦手で、『秘密の勉強会』に参加していたものも多い。そこで仲良くなったものもいるし、以前からの知りあいもいる)

生徒会長は可愛らしい顔をむっつりとしかめて、思案する。

ちなみに『秘密の勉強会』とは定期考査の前などに『対立候補』のひとり——『魔王』久坂あやめの開催しているお勉強会のことで、そこで彼女と知りあい親睦を深めることが和解のきっかけになった。

それから、たびたび生徒会長は『秘密の勉強会』に参加して、久坂あやめはもとよりほかの生徒たちとも交流を深めていた。

基本的に、誰でも仲良くなれる女の子だった。

(上手に立ち回れば、この『運動部部長会議』を私の政治基盤にできるやもしれぬ。文化系の部活動は陛下の腰巾着、春秋コンビが牛耳っているから手出しできないし)

陛下——先代の生徒会長たる円城寺れいかは『女王陛下』などと呼ばれ崇拜されており、鶴海ひまりもその熱心な信奉者のひとりだった。

敬愛するれいかに譲られた生徒会長としての地位を守り通し、立派な生徒会長として振る舞うことが己の責務。同時にれいかは『対立候補』の筆頭でもあるので協力を申し出にくいうえ、ひよっとすると敵対することもあるかもしれないびびょうな間柄だが——。

れいかの権勢があまり及んでいない、この『運動部部長会議』をうまく御することができれば——それは生徒会長にとって心強い味方に、あるいは武器になるかもしれない。

(ともあれ、ここからが私の反撃開始だ! 見ていろ『対立候補』ども! そして新聞部部長・深鳥ふみ! 私の華麗な大逆転の始まりなのだあ〜!)

「会長、にやけてないで会議を始めてください」

威勢のいいことを考えながら生徒会長が忍び笑いをしてしていると、ぐさりと突き刺さるような突っこみが背後から入った。

慌てて振り向き、生徒会長は尻尾を踏まれた猫のようにおおげさに反応する。

「うおっ、ユツキー!? きさまも『運動部部长会議』に参加してたのか!」

「うちの剣道部は部長が山ごもりしてて不在なので、代理でわたしに出席せよとお達しがあつたんですよ」

気配なく背後に立っていたのは、生徒会会計——悠木ともこである。

武士のようにまとめた結わえ髪。女性らしく艶めかしくもかなり立派な体格なのだが、今日もどこことなく覇気がなくぼんやりとしている。

ちなみにもともこは剣道部にも所属しており、その部長である山條ぎんはやや変わった人物で『山ごもり』などと称してよく学校を休む。不登校がつづいたかと思えば校内を着ぐるみ姿で徘徊していることもあり、まあ変人である。

同じく変人が支配する生徒会と同様に、ともこは生真面目にそんな剣道部を支えているようだった。苦勞性の二年生は、過勞働なOしさんのように哀愁を漂わせている。

ともこは溜息混じりに、憂いを帯びた目つきでちいさな生徒会長を見下ろした。

「正直、こんな場所まで会長と顔をあわせたくなかったんですが」

「つれないことを言うなようユツキー! 私たちの仲良しなところを他の連中に見せつけてやるのだあ〜っ!」

「べつに仲良くないです。仕事だけの付きあいです」

「酷いっ!」

ともこに抱きついてつれなく振り払われたり、めげずにほっぺにチュウをしようにとして鳩尾に拳を叩きこまれたり、生徒会長が無駄な動きをしていると——。

「え〜っと、会議始めていいの?」

おずおずと、真横から声がかげられた。

ともこに顔を鷲掴みにされて「ぐい、ぐい」と遠ざけられていた生徒会長は、気づいてそちらに視線を向ける。

そこに、小柄な少女が立っている。

君咲学院は三年生が緑色、二年生が青色、一年生が赤色と制服や体操着が色分けされているが——彼女は一年生である。中途はんぱにのびた髪には白い花飾りが彩りを添えている。書類を重たそうに両手で抱え、LL教室に入ってくるころだった。

「おっ、じめじめ妹! あれっ、きさまも参加するの?」

「変な渾名で呼ばないでよ——」

彼女は神樹いちか。

『対立候補』のひとり——『生き神』神樹はじめの妹であり、一悶着があつたものの、現在には生徒会長ともこうして顔をあわせれば会話をする程度の仲だ。

それでも以前は生徒会長を蛇蝎のごとく嫌っていた彼女だ、今もあまり親しげな感じで

はなく、くちびるを尖らせて喧嘩腰で睨んでくる。

「だって、あたし体育委員なんだもん。うちは委員長の後輩が何か忙しいみたいでさ、『てきとうにやっとういて』って今回の会議の進行を任せられたの」

体育委員長——夜霧はやてもまた自由な行動が目立つ生徒で、よく他の部活動の助っ人などをしている忙しくしており、体育委員会の活動は部下のいちか任せきりのようだ。

困った様子で書類を机に置き、剣道部の先輩であるともこに会釈をしているいちかに——生徒会長は肩を揉んでやろう、と抱きつきにいつてやっぱり振り払われる。

「あ、そっか。いちおう名目上『運動部部长会議』は体育委員会の仕切りだものな、生徒会はその補佐という立ち位置なのだ。委員会の仕切りだからこそ、文化系の部長会議は委員長である春秋コンビが掌握してるわけだし」

優しくしてくれない後輩たちに「しょんぼり」しつつも、生徒会長は会議をしやすいように四角形に配置された長机のひとつに居場所を定め、パイプ椅子に腰かけた。

ともこも無理やり手を握られ引きずられて、不承不承、その横に腰かける。

満足げに頬杖をついて、生徒会長は立ったままのいちかに「ぐっ」と親指を立てた。

「まあ、いいだろう——おまえが進行なら私も気楽なのだ。てきとうに進めてくれ、そろそろ全員集まっただろうしな」

「あたしに指図しないでっ、あたしに命令していいのはお姉ちゃんだけだもん！」
子犬が噛みつくように反発すると、いちかは手を挙げて号令する。

「じゃあ、とりあえず——みなさん席についてください！ 『運動部部长会議』を始めます、よろしくお願ひしまっす！」

* * *

『運動部部长会議』は定期的に開催される運動部の活動実績の報告やそれに基づいた予算の調整、およびそれぞれの部の抱えた課題や問題点などを話しあう——いわば町内会のような代物である。

とはいえ基本的な事項は書類によって提出され生徒会や学院側で処理されるので、単なる交流会としての趣が色濃。雑談したり、お菓子を食べたりして親睦を深める。

運動部は堅苦しい会議など苦手なものが多い。後輩に任せたり意見の主張はせず日和見にやりすごしたりと、あまりやる気のないものが大多数だ。

今回もいつもどおり、『会議』とは名ばかりの弛緩した雰囲気か漂っている。

「予算の決議などについては、以上です。じゃあ、その他の議題ですが——」

『運動部部长会議』の進行を任せられた神樹いちかが一生懸命に、がんばって事前に用意したのだろう議題の内容などを読みあげるなか——。

生徒会長は腕組みして、L1教室に集った各部のまとめ役たちを眺めていた。

(今のところ、滞りなく会議は進んでいるな)

ちなみに生徒会長は文芸部——文化系の部活動に所属しているので、『運動部部长会議』には純粹に生徒会役員として参加している。

會議の結果がどうなるかが所属する文芸部にはあまり関係もない、氣楽な立場だが——氣を抜いてもいられない。

(しかし、さすがに部長クラスが一室に会すると壯觀だな……。みんな運動部だから、体格がいいものが多いし。迫力があるのだあ、暴動でも起きたら私では抑えきれんな)

そんな剣呑な零困氣でもないが、いちおう有事に備えて身構えておく。

『生徒会長再任選挙』にまつわる騒動のなかでは、今まで信じられないような陰謀や罠があちこちに仕掛けられていたのだ。油断はできない。

(この『運動部部长會議』を私の政治基盤にできれば、『生徒会長再任選挙』も有利に運べるはずだ。とりあえず、味方につけておくべきは——)

群雄割拠(?)な運動部の部長たちひとりひとりに視線を向けて、生徒会長はそのなかでも殊更に目立つひとりの女の子に注目した。

麗しく艶やかな黒髪。沙羅双樹の花を模した髪飾り。切れ長の双眸でしっかりと前を見据え、姿勢正しくきちんと座っている。

彼女は人前で話すのが苦手なのか、とちつてばかりの神樹いちかを眺めて、そっと小声で呼びかける。

「いちか、がんばって」

「あっ、お姉ちゃんっ♪ あああ、あたし、がんばるねっ！ 見ててね！」

「うん」

途端に元氣になって両手を振り回すいちかに、その女の子はほんのりと笑った。

(まず知名度といい人気といい、弓道部部长にして『対立候補』のひとりと、『生き神』神樹はじめは外せんな。まあ、はじめめとは個人的に仲良しだし、問題なからう)

『生き神』神樹はじめは『対立候補』——『生徒会長再任選挙』における生徒会長のライバルともいえる相手だったが、すでに和解が成立している。

いまでは親しい友人、そして頼もしい仲間となってくれている。

彼女はあまりこういう場で積極的に発言する性格でもないし、ひたすら妹であるいちかを心配そうに——「そわそわ」として見守っている。

そんな『生き神』神樹はじめの横で、パイプ椅子をギタタンバツタンと前後に揺らしながらやや下品に長机に足をのせている女の子がいる。

「あはは！ やっぱり『運動部部长會議』は強そうなやつがいっぱいだな！ 俺、ワクワクしてきたぞ！」

男の子のように短めな髪。伝法な物言いと豪快な態度。背丈はちいさいのにやたらと存在感のある彼女は——。

(同じく『対立候補』である『魔王』久坂あやめの無二の親友にして、柔道部部长の八壁ひかる。こいつとも、それなりに仲良くやらせてもらっているな)

『対立候補』のひとり『魔王』久坂あやめとも、すでに和解が成立している。その友人である八壁ひかるとも、生徒会長はそれなりに親しく交流していた。

むしろ、『魔王』にまつわる一連の騒動のあと——感謝されたぐらいだ。ひかるは幼なじみである『魔王』久坂あやめのことを、心配していた。けれど、生徒会長はそんなあやめの心を理解し、友と呼んだ。それが、ひかるには嬉しかったらしい。

困ったことがあったら何でも言ってくれよ、友達の友達は俺の友達だっ、とか言われながら背中を叩かれてつんのめって転んで怪我を負った。

さすがは柔道部部长、戦闘力といえば君咲学院でも一、二を争う武闘派だが——。

（あれ、何かユッキーといい、戦争でも起こせそうなら戦闘力高めの連中ばかり周りにいるな、私。何でだ……。べつに戦争する予定なのに、戦闘力いらぬのに）

「会長がひ弱なので、守ってあげたくなんですよ。たぶん」

「うおっ、心を読むなユッキー!? びっくりしたあっ!?」

真面目に何やらメモをとっていた悠木ともこが、小声で囁いてきたので生徒会長は「びっくり」と仰げ反った。いつも生徒会で活動をともしているせいかわ、単純に生徒会長の内心が読みやすいのか、ともこはたまにドキッとするような発言をする。

「あまりジロジロと観察していると怪しまれますよ——まあ生徒会長ごときを気にするような神経質な人間は、この場にはいないでしょうけど」

「わ、わかつてる。会議はユッキーがちやんと聞いててね?」

良い子良い子、とともこの頭を撫でて嫌そうに振り払われてから。
気を取り直して、生徒会長はL教室を睥睨した。

「くかあ——むにゃむにゃ」

目立つのは、大柄な体軀をパイプ椅子に預けて豪快に寝ている女の子だ。獅子のたてがみのような黄金の髪。チア部のユニフォームを身にまとい、露出したおへそのあたりを指で掻いている。だらしない態度で、せっかくの美貌を台無しにしている。

（あそこで爆睡してるのはチア部部长の日滝ましろか。まあ、こいつはどうでもいい——むしろ関わりたくない……）

素早くましろから視線を逸らして、生徒会長は他のめばしい生徒を確認しておく。

（運動部において発言力がおおきく、味方につけておきたいのは——やはり、水泳部副部长にして全国大会優勝経験もある、藁ひびき）

ましろの居眠りにつられたのか、その横で「んああり」と欠伸をしている女の子がいる。こちらも背が高く、日焼けした肌も相俟って無意味に強そうだ。呑気に目を擦ってほぼ長机に顎を接しており、そのまま突っ伏して眠りこけてしまっそうだ。

（こいつも眠そうだな、運動部の連中は会議が苦手すぎるだろ。それに、藁ひびきは自由なやつだからなあ。いまいち、掴みどころがないというか……）

見ていると、視線に気づいたのかひびきが顔をあげて「やっほー」というように手を振ってきた。ギョツとして、生徒会長は慌てて目を逸らす。

ましろやびびきは野生動物のようなもので、制御はできません。せめて逆鱗ぎさうりんに触れないようにするぐらいが関の山だろう。確実にちからになってくれそう——もっと理性のある仲間がほしい。火薬庫を抱えるのは避けたいのだ。

（やはり、人格的にも発言力的にも、私が友好を結んでおくべきなのは——）
「発言しても、構わないかねえ？」

四角形に配置された長机、生徒会長の右側のわりと近い位置に座っていたひとりの女子が、穏やかに手を挙げた。勇ましくも凛々しい、おとなびた風貌ふうぼう。短めの髪は涼しげで、紅を塗ったようななくちびるは艶やかだ。

リストバンドと膝のサポーターで体軀を補強しており、何だか歴戦の勇士という感じだ。だが表情はどこまでも優しげで、周りのすべてを包みこむように広く深く優雅である。

（テニス部主将、花丘はなおかまり）

「ちょっと困っていることがあるんだ。よければ、みんなの意見を聞かせておくれよ」
花丘まりはその名のとおり、花が咲くようににこやかに語る。

そんな彼女をあらためて、生徒会長は注視する。

（通称『運動部のビッグ・ママ』……。人気だけでいえば、『対立候補』に匹敵する大物だ。まあ、花丘まりは縁の下の力持ちタイプだから、『生徒会長再任選挙』には興味ないのだろうが）

ゆえに、他の『対立候補』の陣営にいないからこそ、味方にもつけやすい。実務能力も



発言力も高いため仲間を引きこめれば有用だし、何より個人的に生徒会長はこの女の子を好ましく思っていた。

優しく、あったかくて、いいひとだから。

「まりちゃん、困っていることとは何なのさ？ 生徒会がちからになるぞお？」

積極的に、生徒会長はまりに呼びかけてみた。彼女の好感度を稼ぎ、ちから強い味方になってもらうために。それ以上に、単純に友人として悩みがあるなら手を貸したかった。

まりは、はんなりと頬ほほに手を添えた。

「それがねえ——聞いておくれよ、ひまりさん」

（むう。相変わらず、何だかおぼちゃんっぽい雰囲気だな——）

独特な雰囲気たふいきを漂わせながら、まりは溜息混じりに語った。

「他の部長さんたちも被害に遭ったりしてると思うんだけどねえ、近ごろ厄介なことが頻発しているんだよ。テニス部はのんびり平和的になってのが信条なのに。困ったもんだねえ、あたしや気苦労が絶えないよ」

（まりちゃんの喋りかただと、あんまり困っている感じがしないが。ほんとに何なんだろう、この肩叩かたたたきをしてあげたくなる感じ……！ お、おぼちゃん！）

「おやおや、どうしたんだい、ひまりさん。あたしのことをじつと見て——やだよお、この子は！ ふふ！」

照れたように手を振ってから、まりは生徒会長だけではなく全員に語りかける。

「ともあれ、問題になってるのは『部活荒らし』のことだよ」

その異様な響きの言葉を、神妙に口にする。

「近ごろ、いろんな運動部に出没しては備品を壊したり部員にちよっかいをかけたたりする生徒がいるんだ。ちよいと、懲らしめてやりたいとこだけどさ。何でまたその子がそんなことするのかもわからないしねえ、あんまり横暴な対応すんのもどうかと思うし」

「ま、まりちゃん！ お茶いれたぞ、飲むかっ!？」

「おやおや、ひまりさんはほんとに良い子だねえ——」

なぜか甲斐かい甲斐がいしくお茶をいれた生徒会長の頭をそつと撫でて、まりは幸せそうにほっこりと笑った。お茶を一口啜すずって、たつぷりと味わってから。

あくまで穏やかに、のんびりと。

「まあ、生徒会が対処してくれるなら、あたしや気が楽だよ。何でその『部活荒らし』がそんな真似まねをしているのか、原因だけでもちよいと突きとめておくれよ。部員たちもかなり殺気立ころもつてるし、このままじゃ面倒まどろなことになりそうなんだよねえ？」

「それは構わんが、その『部活荒らし』とは何者なのさあ？」

まりちゃ〜ん♪ とまりの背中に抱きついて甘えていた生徒会長が、今さらながら会話にくわわった。返答したのは、正面に腰かけている『生き神』神樹かみはじめである。

「わたしも知ってる。弓道部にもきたよ。しばらく活動できないぐらいに、備品を台無しにされた。的に、本物の矢を撃ちこまれたの」

「じめじめのとも、被害に遭ってるのか——」
はじめは先日まで彼女を悩ませていた『生き神』云々の騒動から解放されたばかりで、ようやく好きな弓道に打ちこめるようになったというのに。

『部活荒らし』によって備品を壊されたりしたら、大迷惑だろう。友人として、看過できない。生徒会長は、まりの肩を揉んであげるのをやめて真面目に話を聞くことにする。
次に発言したのは、長机に頬杖をついた水泳部の裏ひびきだ。

「運動部はだいたいやられてるっちょよ、うちもプールで巨大なプリンをつくられてしばらく活動できなかったっち。しゃっちゃんが超怒ってた、うちはプリンたくさん食べられて嬉しかったっけど」

「俺も戦ったぞ！　ありやあ強かったなああつ、また勝負してくんないかなー！」

ひびきの発言を継ぐように、柔道部の八壁ひかるもなぜか嬉しそうに言い放った。

「運動部をつづげざまに襲撃している……？　何の意味があつてそんなことをしているのだあ？」

生徒会長は首を傾げ、腕組みして思案する。

「まあ——たしかに興味深いし、早急に対処せねばならんと私も思うぞ」

名残惜しくまりから離れて「ひまりさん、飴ちゃんあげるねえよ」「うわあい、飴ちゃんだ〜！　せえとかいちよお飴ちゃんだあい好きよ」と無駄な動きをしてから、再び着席する。



最後まで立ち読みしてくれて
どうもありがとう！
続きは本で楽しんでね！